

天津考試院との交流報告

研究開発部試験作成支援研究部門 大津起夫

要旨：平成16年における中国天津市招生考試院（Tianjin Municipal Educational Admission and Examinations Authority, TAEA）との交流について報告する。8月には天津市内で開催された入学試験についての国際フォーラム（国際教育考試論壇）へ招待を受け、日本の教育制度と大学入試センターの役割について報告した。この会議の内容と天津考試院の役割について紹介する。また12月には天津考試院のスタッフが、大学入試センターを訪問した。

平成16年の夏、8月14日から17日にかけて「国際教育考試論壇（International Educational Examination Forum）」が、天津市教育招生考試院（これ以降では天津考試院と略称する）の主催により天津市内のホテル（金皇大厦Golden Crown Tower）で開催された。教育招生考試院は、日本の大学入試センターに類似した機能を持つ組織である。北京には教育部（日本の文部科学省に相当する）に直属の考試

院があるが、このほかにいくつかの大都市に考試院があり、それぞれの地方における大学入学試験等の業務を担当している。天津考試院は天津市での業務を担当する機関である。この会議の発表者は、海外の大学入学試験実施機関の関係者、海外（特に米国）で活動している中国系の研究者（多くは心理測定分野の関係者）及び中国国内の考試院の研究者であった。聴衆は、天津考試院の関係者をはじめ中国国内の考試院と大学の入試関係者であり、日本における国立大学入学選抜研究連絡協議会と類似した参加者の会議である。参加者名簿には海外からの参加者も含め120名余りが掲載されている。この会議の直前には北京で国際心理学会が開催されており、こちらへの出席を兼ねていた海外在住の研究者が多かったと推測される。

6月に研究開発部あてに天津考試院からこの会議への出席の要請があった。小規模なものを予想していたが、実際に参加してみるとこの会議をきっかけに国内および海外の入試実施組織

および研究者との関係を強化しようとする天津考試院の強い意思が感じられるものであった。

大会前日の13日に名古屋からの直行便で天津空港に到着したあと、通訳を担当された天津市教育委員会の白龍生氏に会場となっているホテルに案内された。午後には天津考試院の喬麗娟（Qiao Lijuan）院長をはじめとする幹部との懇談があり、夕方には、歓迎の晩餐会があった。招待されたメンバーには、項目応答理論（IRT）の権威であるオランダTwente大学のvan der Linden教授や、平成16年の12月に大学入試センターを訪問された韓国教育課程評価院の金京堦（Kim Kyung Hoon）氏も含まれていた。van der Linden教授は、この会議のあと日本を訪問し、東京大学駒場キャンパスでのワークショップ、及び大学入試センターにて講演を行っている。

喬院長との会談は、会議室の正面奥に肘掛け椅子2脚を並べ、向かって右側に院長、左側にゲストが着席し、側面に沿って天津考試院の幹部が着席する形式のものであった。会談の内容は幾分形式ばったものであったが、喬院長は今後も交流を深めたいと考えていること、また平成16年12月に日本への訪問団を計画しており、大学入試センターを訪れたいとの意向であった。翌日の会議中には、二つのテレビ局の

クルーによるインタビューを受けた。

翌8月14日からホテルの大宴会場で会議が開催された。外国からの参加者と院長及び教育部関係者との会談が会議の前に催された。天津考試院の喬院長の開会の挨拶のあと、天津市副市長で招生委員会（入学委員会）の張俊芳（Zhang Junfang）主任（主任という職は日本での部長あるいは局長相当と思われる）、教育部の考試中心（入試センター）主任の趙亮宏（Zhao Lianghong）氏、およびvan der Linden教授の3名の挨拶があった。

初日の司会は、天津考試院の岳德経（Yue Dejing）副院長が担当した。最初の講演は教育部高校学生司長（「高校」は日本の大学にあたる）である林蕙青（Lin Huiqing）氏による40分間の中国語の演説であった。参加者は真剣にメモをとっており、入試実施関係者に強い影響力のあるようだった。演題は、「中国独自の特色をもつ入試制度の構築（Constructing an examination system with Chinese characteristic）」であり、通訳者による当日の説明では、現在全国ではほぼ統一的に実施されている大学入学試験についての権限を、より個別の省や大学に委譲したいが、これが問題なく実行されるためには規律が重要であることを指摘するものとのことであった。

2番目の発表者は大津であり、通訳付で約1時間をかけて日本の戦後から現在にいたる教育の状況、特に戦後の人口動態と進学率の変化及び現在の大学入試制度、特に大学入試センター試験の役割について紹介した。事前に数ページの英文の説明を作成しておいたが、これは外国からの参加者にのみ配付された。発表のスライドは英文を用い、日本語での口頭発表が中国語に通訳された。

午後には、台湾の大学入学考試中心の夏蕙蘭 (Hsia Hui-Lan) 氏、次いで韓国教育課程評価院の金氏がそれぞれの試験制度と状況について報告し、5番目には夏氏と同じく台湾大学考試中心の管美蓉 (Kuan Mei-jung) 氏が1991年と2004年に行われた調査に基づいて大学入試の中等教育への影響を報告した。台湾では、高校の教育目標の方針が1983年と1996年に設定されており、この間の変化について焦点をあてたものである。この後、上海教育考試院の雷新勇 (Lei Xinyong) 氏による試験データ分析法についての統計理論 (分散成分モデル) に関する発表と、米国のカレッジボード研究員の王湘波 (Wang Xiangbo) 氏による新しいSAT (nSAT) についての解説があった。

2日目には、岳偉 (Yu Wei) 副院長の司会で8件の講演があった。午前

には4件の発表があった。米国ハーコートアセスメント社のJohn Olson氏がテストの質の保証についての解説を行い、ついで天津考試院の趙彤路 (Zhao Tonglu) 氏が英語音声試験のためのデータ分析システムについて報告した。さらにハーコートアセスメント社の易青 (Yi Qing) 氏による小中学校におけるオンラインテストの紹介があり、午前の最後の講演では米国ETSの銭家和 (Qian Jiahe) 氏がe-rater (エッセイ自動採点システム) の開発と応用について報告した。

午後には、まずオーストラリアETC (Educational Testing Center) のPeter G. Knapp氏によるオーストラリアにおける大学入学試験についての報告があった。ニューサウスウェールズ州での高校卒業試験、およびGAT (General Achievement Test) と呼ばれる学力試験の特徴とラッシュモデルによる評価についての講演であった。ついでETSの張金明 (Zhang Jinming) 氏がNAEP (National Assessment of Educational Progress) について、その目的と特徴 (不完備配置を用いた実験デザインなど) を報告した。後半には、ハーコートアセスメント社の王蜀東 (Wang Shudong) 氏と焦虹 (Jiao Hong) 氏に、小中学校向けの学力試験であるスタンフォードアチーブメントテスト

(SAT10) についての紹介し、同じくハーコートアセスメント社の劉志明 (C. Allen Lau) 氏によるスタンフォードアチーブメントテストのスコア標準化についての講演があった。

3日目は、午前中に岳偉副院長の司会で4件の講演があり、午後は二つの円卓会議のセッションが並行して開催された。午前中の最初の発表は、オーストラリアビクトリア州課程評価院 (Victoria Curriculum and Assessment Authority) のBill Perrin氏によるビクトリア州における大学入試とGATについての紹介であり、ついでETSの顔端麗 (Yan Duanli) 氏による認知診断モデルと、PSAT/NMSQT及び新TOEFLへの応用についての発表があった。また、後半では、テキサス大学の張華華 (Zhang Huahua) 氏が米国におけるCAT (Computer Assisted Testing) の過去30年の発展についてのレビューを行った。最後の発表は教育部考試中心元主任の楊学為 (Yang Xuewei) 氏による中国における入学試験全般についての解説であった。楊氏の講演はスライドなしであったので通訳を通じての断片的な理解しかできなかったが、科学制度の歴史とその失敗から話を始め、試験によってどのような能力が測られているのか、入学試験のもつ限界などについてのものであった。楊氏は

趙亮宏考試中心主任とともに、『日本・中国高等教育と入試—二十一世紀への課題と展望』(中島直忠編, 玉川大学出版会, 2000) の共著者である。

午後の二つの並列のセッションは、大学入学試験制度一般についてのものと、アイテムバンクの管理に関するものであった。私は前者のセッションに参加したが、日本の入学試験についての関心は高く、いくつか質問を受けた。台湾からの参加者による大学入試制度の解説もあったが、かなり日本と類似のシステムであることがわかった。

会議のあと夕食時には催しがあり、14日には市内のタワー見学のあと「狗不理」(餃子の名店) での夕食があった。翌日には伝統的な京劇舞台のある博物館でのアトラクションがあり、最終日には伝統芸能などのアトラクションがホテルで催された。会議終了後の17日には近郊 (万里の長城) への遠足があったが、これには参加せずに同日の午前に帰国した。

以下では、天津考試院の役割について簡単に紹介する。

天津考試院は、天津市の機関であり、高等教育機関への入学試験のみでなく、高等学校への統一入学試験、自学者のための大学相当の教育試験、社会人試験 (social test)、その他の政府や非政府機関による試験、さらには海

外のテスト機関との連携プロジェクトを行っている。さらに、学力試験にかかわる理論、政策、技術、管理の研究も行っている。

天津考試院の前身は、1972年に設立された天津市普通高等学校（大学）招生委員会、1982年設立の天津市高等教育自学考试委員会、1983年設立の天津市中等学校（高校）アドミッションオフィス、1984年設立の天津市成人高等学校（大学）招生委員会である。1992年には、これらを統合して天津市教育招生考試中心（入試センター）となり、2000年に天津地区の学力試験と入試を担当する現在の天津市教育招生考試院（TAEA）となった。現在、120名の職員、数十名の非常勤の国内外の専門家・研究者、及びテスト設計の専門家グループから構成されている。また、国内外のテスト機関、心理学研究機関及び大学との交流を行っている。天津考試院は、現代的な教育評価理論、統計技術、コンピュータ技術、ネットワーク技術、及び入試と試験のための先端科学技術を重視している。また、その入試と試験の改善への寄与によって教育部及び天津市からいくつかの賞を受けている。

天津考試院が担っている試験は大学入試を始めいくつかのものがある。全国统一の大学入試は毎年6月に実施される。受験者は高校卒業生または同等

の学力を持つものである。試験は大きく二つの分野、すなわち科学・技術及び文学・歴史（芸術と体育を含む）に分かれる。

このほか、大学院及び研究所の修士課程への共通入学試験や、高等職業技術院校（vocational and technical college）での5年一貫教育への中学校からの入学試験、高等職業技術院校への春季統一試験（職業学校の卒業生、及び高校の過年度卒業生が対象）、高等職業技術院校生を対象とする大学への編入試験を実施している。

成人高等学校（大学）入学試験は、高校卒業程度の資格をもつ成人を対象としている。短期大学、大学、及び短期大学卒業生を対象とする大学入学試験の三つのカテゴリーがあり、秋季に試験を実施し翌春に入学となる。

また、天津地区の普通高級中等学校（普通高校）、職業高級中等学校（職業高校）、技工学校（工業高校）などへの試験も行っている。科目は、中国語、数学、外国語、物理、化学、政治、体育などである。毎年約10万人がこれらの試験を受験する。

三つ目には、高等教育における自学者を対象とする試験がある。これは、国家的規模での試験システムであり、年に4回1月、4月、7月、10月に実施される。天津は1981年にこの試験の実験的实施地域の一つとして設定さ

れた。この試験は、9つの教科（経済学、経営、法学、教育、文学、理学、工学、医学、農学）があり、184科目の試験が短期大学、及び学部相当の教育について実施されている。過去に55万人の受験者がおり、毎回の試験でおよそ10万人が受験する。これまでの卒業生は11万人である。

このほかに、学位とは別の数種の資格試験を実施している。これらには複数種類の情報処理及び英語の資格試験が含まれている。

喬院長との面談にもあったが、平成14年12月15日には天津考試院から卢耀增（Lu Yaozeng）副院長を団長とする8名の視察団が入試センターを訪問した。この際には、理事長室での面談のあと、研究開発部のスタッフによる入試センターの活動の紹介を行った。まず、研究開発部で開発を行っている試験統計情報データベースについて吉村宰助教授（現長崎大学）が紹介し、ついでリスニングテストの計画を内田照久助教授が、また法科大学院適性試験については椎名久美子助教授が紹介を行った。中国語の資料の作成と当日のプレゼンテーションの通訳は、研究開発部客員研究員の張一平氏（東京大学大学院教育学研究科）が担当し

た。このあと、所内のOMRなどを見学し、研究開発部スタッフと懇談を行った。

天津考試院主催の会議への参加を通じて、中国の研究者のテストテクノロジーの水準はかなり高いと感じた。特に米国に在住する心理測定分野の研究者の層が厚く、最新技術の導入は日本より早い可能性があると思われる。また、この分野での女性の管理職・研究者の多いことも印象に残った。天津考試院の喬院長、副市長の張氏、教育部の林氏はいずれも女性である。

天津市内には旧租界時代に建てられ1976年の唐山大地震に耐えた瀟洒な建築があり、美しい街並みが残っている。特に、天津外国語学院の建物は印象的である。一方、空港から市内への道路は北京オリンピックを見込んで改修中であった。市内の中心部には総ガラス張りの高層ビルも建てられており、街の様相は急速に変貌を遂げつつある。特に会場となったホテルは、その名前のとおり外周は全面金色のガラスで覆われており、日本との建築色彩の好みの違いを感じさせられた。